

厳しい寒さが続いた今年の冬でしたが、3月も半ばを過ぎ、一気に本格的な春の訪れを感じる季節になりました。

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご列席下さったご家族、保護者の皆様、本日はまことにおめでとうございます。本日こうして皆様と卒業生の門出をお祝いでいることをほんとうに嬉しく思います。

神奈川学園でみなさんの生活が始まったのは2017年、平成29年でした。平成の終わりも近づいていたこの年、アメリカではトランプ大統領の就任などがニュースになりましたが、世界を揺るがす「大ニュース」と呼ぶべきものは比較的少ない、落ち着いた年でした。そのような中での、みなさん自身の中学生生活も落ち着いたスタートだったと思います。

—昨日、みなさんは進路開拓期の経験や後輩へのメッセージを記してくれました。私は全員分を読ませてもらいましたが、6年間を振り返る中で、入学当初のことに触れている方もいました。一人の方の文章の冒頭をご紹介します。

——神奈川学園に入学の日、セーラー服に袖を通して初めて登校した日のことは今でも鮮明に覚えています。それからの6年間は私にとって実のある経験でいっぱいでした。中学1年生、緊張しながら話していたクラスメートがだんだん気の許せる友人になっていったこと、学年が上がるごとに自分のできることや学校を通し、皆と協力して行う行事が増えていったのは中学の私にとってとてもうれしいことでした。——

みなさんは日々の授業、委員会活動、部活動に着実に取り組みながら、球技大会、文化祭、音楽会を始めとするさまざまな行事を頑張る日々を送っていきました。大きく成長し、揺れ動きもする中学生という時期ですから、一人ひとりにとってはときに大きな波が押し寄せる日もあったでしょうが、学年全体としては平穏な、落ち着いた日々でした。

それが大きく変わったのはみなさんが中学3年生として年度末を迎えようとしていた2020年でした。そこからのみなさんの高校3年間は、学校という枠を超えた、世界的な大きなうねりとともにあった時間だったと言えるかもしれません。言うまでもなく新型コロナウイルスの影響です。この頃のことについて、多くの方が文章の中で触れていました。

——私たちの世代はコロナ禍直撃で、行事も学校生活もいつも通りにできないことの方が多くて、本当に辛い時もあったし、理不尽に思うこともあったけれど、その中で頑張れたことはとてもよく記憶に残っているし、楽しかったです。リモート授業で始まった高校生活は、漠然とした不安感がありました。部活が大好きだったので、活動ができない間が悲しかったけれど、夏頃に再開することができたときはほんとうに楽しかったし、高2になって部内の最上級生になったときは、なかなかうまくいかず大変だったけれど、それを乗り越えたことで、同学年の部員とも仲良くなれて、それが高校生活での一番の宝物だと思っています。——

もう一人の方です。

——ついに私も高校生になるんだと思った矢先にコロナ禍が私たちに襲いました。海外研修もなくなり、授業もすべてオンラインで友達に会えない、文化祭・球技大会もない、正直最悪の高校生デビューでした。しかしこの3年間で何もかもとはいかずとも、自由にできる範囲の中で、私たちができることはすべて楽しめたと思います。「授業が大変だ」「今日の部活、なんとなく行きたくない」と友達と言い合って笑えることがすごく幸せなものだと学びました。コロナ禍の中で高校3年間を過ごして実感したのは、「あたり前をあたり前にできるありがたさ」だと思います。——

さまざまな制約がある中でも、みなさんはできるかぎり可能性を広げ、高校生活を前向きに創り出していきました。そんなみなさんの姿勢や言葉に触れる時、みなさんが高校2年生のときにお会いした辻村深月さんのメッセージを思い出

します。辻村さんはこんなふうに言ってくださいました。

——コロナ禍の失われた時間、などといい加減なことを言う人がいます。みなさんはそんなことばに惑わされないください。いつもとは違う時間だったかもしれないけれど、みなさんの時間はたしかにそこにありました——

みなさんの6年間、とりわけ中学の終わりから高校生活は、たしかに平穏ではありませんでした。しかし、だからこそ得られたこともある——それは人とのつながりであったり、「あたりまえ」であることを幸せに感じる気持ちであったり、今を大切にする姿勢であったり——多くの方が自分の中で「得られたこと」を書いていることに、むしろ私が勇気づけられる思いでした。

今、コロナ禍は落ち着きつつあるとはいえ、世界を見渡してみると、厳しく悲しい現実がいたるところに顔を覗かせています。ウクライナでは、日々多くの方の命が危機にさらされ、残念ながら解決の糸口は見いだせないままです。つい先日はトルコが大地震によるたいへんな被害に見舞われました。他国の例を引くまでもなく、12年前、日本も未曾有の震災を経験し、その傷跡が完全に癒えたというには程遠い状況です。

そしてみなさんが新しい一步を踏み出していく世界も、みなさんに対して優しいばかりでなく、ときに厳しく恐ろしい一面も見せつけます。しかし、この3年間、さまざまな制約の中でも最大限の可能性を見出し、切り拓いていったみなさんであれば、どんな難局もきっと乗り越えていけると信じています。

ここで、ある本の一節をご紹介します。

今日のような節目の日に、大切なことを思い出させてくれる一節です。そして、一昨日みなさんが取り組んだことにもつながる一節だと思います。

それが記されているのは、詩人であり民族楽器奏者でもある京都在住のアメリカ人、ロビン・ロイドさんという方が書いた、ちょっと変わったタイトルの本——『幸せに長生きするための今週のメニュー』という本のなかです。アメリカの方なので、英語で書かれて、訳文がついています。こんな一節です。

“It only takes a moment / To give thanks / For all that has come and gone.”

こんな訳文がついています。

——これまで出会い、別れてきた/すべてのものに/感謝することは/ほんの一瞬でできる

ここで言っていることは「感謝すること」だけでなく、「ちょっと立ち止まってみる」そして、「今、いる場所を見回してみる」ということなのだと思います。

この「ほんの一瞬立ち止まってさまざまなことに思いをはせる」時間をもつことは、実は今日のような節目の日だけでなく、それ以上に、厳しい現実につづかってどうしていいかわからないときや、あるいは毎日が当たり前のように流れていく、平凡に思える日々においてこそ、より大きな意味をもつものかもしれないとも思います。

厳しい現実につづかったとき、あるいは毎日が平凡に感じられるとき、そんなときに、一歩立ち止まって、今まで歩んできた道を振り返ってみる。自分がいる現在地を確認してみる。出会ってきた方々に思いをはせてみる。そんな一瞬が大切なのだと思います。今、流れている時間が、いかに大切に、みなさん一人ひとりにとって、いかにかけがえのないものであるかを改めて確認し、自分がこれからどう自分の人生を歩んでいくのかを改めて見通していくために。

もちろん今日はみなさんの人生の大きな節目の日です。今日も少し立ち止まって、みなさんの18年間の人生、あるいは6年間の学校生活で出会ってきたさまざまな方々——それはご家族の方ももちろんですし、友だち、先生、先輩、後輩、

あるいは研修や行事で出会ったさまざまな方々——そんなお一人おひとりに思いをはせてみることに特別な意味があります。そして、目の前にいる人にはぜひ直接感謝を届けてください。また、今、近くにいない人には心の中で感謝の気持ちを伝えてみてはいかがでしょう。そのような、少し立ち止まって、感謝の思いをはせる「一瞬」が、今日という日をより特別で、より大切な「節目」にすることにつながると思うのです。

ちなみに、先ほど紹介した一節はつぎのようにつながります。

“It only takes a moment / To remember to feel / “Yes…Life is Sweet,” / And to remember / To say / “I Love you.”

こんな意味です。

「そう、生きることはすばらしい」/その思いをよびおこすこと/「愛する心」をよびさますことは/ほんの一瞬でできる

先ほど私は、みなさんが踏み出す世界には厳しい面もあると言いました。しかし同時にみなさんの前に広がる世界と未来は、どこまでも広く、可能性に満ちています。その世界で、みなさんがもてる力を存分に発揮しながら、みなさん自身の人生を力強く歩んでいかれることを祈っています。

そして、最後にみなさんにお約束したいことは、神奈川学園は、みなさんがふと帰りたと思ったときにいつでも帰ることのできる、「心のふるさと」であり続けるということです。みなさんが帰ってきてくれることをいつでもお待ちしております。

本日はご卒業、おめでとうございます。

以上をもちまして式辞といたします。